

---

# 君と一緒にいる時間

諒夏

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

君と一緒に時間

### 【著者名】

諒夏

N6851D

### 【あらすじ】

待ち合わせに早く着いてしまった彼。そこで彼女から聞かされたある喫茶店を思い出します。彼はふとそこへ立ち寄ろうと彼女からの情報でその場所へと向かいました。そこで彼女が感じたものを共有できる事の重大さに気づき、彼は彼女と共に居ようと告げます。

(前書き)

彼は彼女と待ち合わせ。  
そんなありきたりのシュチュエーションの中に存在する一人の思い  
を感じてください

駅のホームから聞こえるのは電車の到着を知らせるアナウンス。

”想つたより早く着いたな。”

予定の時間よりもいくばくか早い。

この時間は朝の通勤ラッシュのように満員状態だ。

たぶん会社の就業時間や学校帰りと重なるからだろう。そんな時に限って事故とかが起こりやすいから早めに到着するようにしたんだけどな。

”まあ、たぶんいるだろ？な”

時間には厳しい彼女はいつも待ち合わせ時間、10分前にはそこについて、近くの喫茶店または屋内でもぶらついているはずだ。

遅れる時にはメールが来るのが常だし、そういう点はマメだと想つ。まあ、常識といえばそうだが、今時はドタキャンも当たり前のように非常識な奴が多いと聞く。

でも彼女の場合はそういうことがないから安心。

ホームから下へ降りると冷たい空気がひとつと押し寄せてくる。

”さみいー”

マフラーを巻きなおし、改札を出る。

そこに彼女の姿はなく、なんとなく息を吐いて辺りを見回す。いつもいる駅構内のカフェにはいないみたいだ。

なんでわかるかつて？

そりや、彼女は必ず改札から見えるガラス張りの位置にいるから。そうしないと約束してる相手から見えずらいからだつて。まったく、そんなに氣を使う必要はないと思うが、彼女は氣をつかつてるんじやなく、

ただ見てるのが楽しいんだとか。

まあ、俺にはわかんねえことかもな。

”でも、来てないとなると、ビーストかな。”

約束まで30分もあることに気付いて、これからビーストするかを考える。

そして、ひとつ思い出した事に善は急げと共に改札を出た。確か、この近くにあつたはずだ。

”彼女が前に言つてた喫茶店…。”

近くにあるはず喫茶店を田指して歩く。

その喫茶店は彼女から聞いたのがきっかけだった。

『す、すごいお店なんだ』

レトロつて感じじやなく、アットホームな感じだと言つていて、聞いてから数週間経つがその時から興味があつたから足を向けていた。

その店はすぐに見付かった。

一階にあるそこは下が寿司屋という珍しい組み合わせで、

一見、そこに入り口があることには気付かない。

まあ、ひとえに彼女の趣味のおかげで迷わず見付けられたが…。

ドアを開ければ聞こえてくるのはクラシック音楽。

ピアノで構成されたものだろうか？

あまり、こういうのを聞かない俺にはわからないが、  
彼女が言っていたアットホーム的な感じというのは分かるような気がした。

禁煙席に腰掛け、まだ来ない彼女にメールを打つ。

『君が気に入ってる喫茶店にいるよ。』

「写メで気に入ったものを撮つて送つてくる彼女。

最近の彼女の趣味の一つと言つてもいいかもしない。  
入り口や、名刺があればそれをもらつてきたり、

その店の雰囲気、接客態度とかの感想や食べたものとかもヤフーで保存しているほど。

何を食べたとか、どうこう感じだつたとか。

互いに好みはあんまり似てないけど、でも落ち着ける場所と言つて  
た彼女の言葉は間違いではなかつたようだ。本当に落ち着ける。

「何になりますか？」

店員に聞かれ、彼女が食べたというホットケーキセットを頼んだ。  
彼女がその店が気に入つてている理由は雰囲気ばかりではない。

「でははちみつはどれになさいますか？」

こここの店ではいろんな味のはちみつを自分で選べるというのも特色  
のひとつだらう。

『私はね、蜜柑の蜂蜜にしたんだ。』

そういうつてたのを思い出して、俺もそれにした。

『蜜柑の匂いがしてるんだけどはちみつなんだよ。』  
味はね。

そういうつてたつて。楽しみだ。

ブルブルツ。

着信があつたことを知らせる携帯。

『あの喫茶店？前に私が言つてた？』

彼女は覚えていたのが意外だつたみたいで。

『そり、そこにいるから』

そう返信すると紅茶が先に運ばれてきた。

セイロンらしく、ポットで運ばれてきて、

茶場を自分の好みで取れるらしい。

『茶場をどうやってとるのか分かんなくて…』

急いで飲んだ。

渋味が出る前に。

聴くのを躊躇つたのか、聽けずにいたらしい。

『だつて、聴くのなんとなく恥ずかしかつたんだもん』

そういうて苦笑いしてた彼女の顔が浮かんで口許を少しだけあげて

しまつた。

思い切つてオレは店員さんにどうやって茶葉を取り出すのか聞いてみた。

男性にはよく聞かれるんですよ

つてその店員さんは少し笑っていた。

確かに、男性はあまりお茶を入れるイメージがない。

それは間違いないだろ？

まあ、例外もいるだろ？が、俺はそれに当てはまらず、お茶をほどんど入れない。

というかそういうことをするのが面倒だと想つ。  
だからかもしけない。

ひとしきり店員さんからレクチャを受け、茶葉の取り出し方を聞いた俺は急いで彼女にメールをした。

忘れないようにと、あと彼女がどんな反応を返していくか楽しみだ

つたから。

茶葉を教えてもらひつたようにポットから取り出して受け皿に降ろす。確かに、色があまり出過ぎるとおいしくないだろう。あんまり紅茶に関しては詳しくないが、渋みが残るのは勘弁して欲しい。

『最初はストレートで飲んでみて』

茶葉が蒸らされる間にホットケーキが運ばれてきて、それにかける蜂蜜の甘さとセイロンティーの味がすこくいいんだから。

そう言つていたのを思い出してまずはホットケーキに蜂蜜をかけてみた。

確かに、蜜柑独特の柑橘系の味だけ決して嫌な甘さじゃない。そしてセイロンティーに砂糖を入れない理由も分かつた気がした。ここで砂糖を入れてしまつと甘すぎて男性では食べづらいかもしない。

「これにして正解だつたな」

思わず呟いた。

彼女が言つてたこと、分かつた気がしたから。

待つてゐる間に同じ楽しみを味わえる事がこんなに気持ちを穏やかにしてくれることなんて

今まで想像もしなかつた。

「もつと早くに知つてたらよかつたなあ」  
なんて想つてみたりもした。

そんな時、ドアベルが鳴った。

客が来たのだ。

ふと視線をやるとさよろぎよろと辺りを見回し、探している様子だ。

「ひつか

手をあげてやれば彼女が「あつー！」と声を漏らす。

店員さんに案内されるまでもなく前の席に座った彼女が着た早々謝つた。

「ごめんな、待たせて」

「全然。だつて約束時間まだだろ？」

ほら。

腕時計の時間は約束よりも10分も早い。  
急いでくれたのだろう。

息が上がってる。

「注文はお決まりでしょうか？」

店員の言葉に彼女はオレと同じモノを注文した。

はひみつは何にならこますか？

「ゆずでお願いします」

かしこまりました

ひとしきり会話を聞いていて、店員さんが去った後、彼女はオレの方にある蜂蜜を指して

「何はちみつにしたの？」  
と聞いてきた。

オレが、

「蜜柑」と答えると

「おいしいでしょ？」って笑つた。

だから、オレも「ああ」って答えた。

彼女の携帯に茶葉の取り出し方というタイトルでメールを出したのだが、

まだ見ていなかつたらしく、オレに  
「茶葉をどうやって出したの？」

って聞いてきた。

「メールしただろ？」

つてオレが返すと

「え？」とズボンのポケットから携帯を出した。  
操作をしながら「来てた」って小さく声をあげる。

「うわやつて、うわするんだって」

店員さんにレクチャーを受けたように説明した。

ポットにある茶漉しの淵をフォークで軽く持ち上げてはす。  
そうする事で茶葉が取れるといつわけだ。

「なるほど…」

「さつき聞いたんだ」

男性にはよく聞かれるらしいから。

そういうと彼女は苦笑いを浮かべた。

二人で喫茶店を出る頃にはもお夕闇に空が染まり、寒さを感じた。  
店内が暖かかったかもしれないが、余計に冷たかった。

「明日休みだろ？」

「うん。」

「んじゃ、家かえつて暖まるつか」

「そだね」

そつと手を差し出すと彼女も当たり前のよう握り返してくれる。そんなちょつとした事がうれしくて、どうりともなく笑顔になる。

キミを待つてた瞬間は短かつたんだけど、正確には。でもオレには長く感じた。

そして、キミが一人で行つたあの喫茶店での時間も共有出来たみたいでうれしかった。

何でだろ?…めつたにないからかな?

キミを待つ瞬間って。

だからこんな事想つただろうか?

「なあ、一つ提案があるんだけど」

唐突にオレがそう言つたら彼女はきょとんとして「なあ?」と返した。

「今度からは、一緒に場所にいかねえ?」

「…?」

どうこう意味?

不思議そつなまなざしでオレを見つめる彼女。

どうこうていいのかわからねえけど、なんか、つまく言葉にならない。

「だから、こうこう店とか見つけたら一番最初に一緒にに行こう」時間…これから一緒にいる時間を増やしていきたい。

一緒に色んな事を探していく?…一緒に。

そういうと彼女は少し頬を赤らめながら俺の言つた意味をわかつてくれたのか、何も言わなかつた。でも握つた手をそつと握り返して首をちょっと下に向けて頷いてくれた。

キミを待つ瞬間に想つたのは暖かさ。

キミが何処で何をして、何を感じたのかを共に共有したい。

一緒にいたい。これから先、何年たっても。ずっと…一緒に。

(後書き)

こんな感じの店が本当にあります。  
それぞれ思ひ浮かべてみてください。  
あ、こうこうのあるよね、って少しでも思つてくれたらうれしいで  
す。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6851d/>

---

君と一緒の時間

2010年10月10日11時02分発行